

事件という名の事件

作演出 ふじたあさや

登場人物

男優 1

男優 2

男優 3

男優 4

男優 5

男優 6

女優 1

女優 2

女優 3

舞台装置らしい舞台装置は必要ない。

必要なのは、映像を映すことのできる壁面と、多様な場面に
対応する空間と、俳優たちが待機できる空間である。

1 プロローグ

非常ベルの音で、俳優たちが登場する。

女優1

『横浜事件』をご存知ですか？

男優2

御存知の方もいらっしゃるでしょうが、御存知なくてもある意味当然
かと思いません。

男優3

私たちも、今回の企画が出てきてから、いろいろ資料をあたって、「へ
え、こんな事件だったのか」と、あらためて驚いているほどです。

女優2

御存知ない方のために説明させていただくと、『横浜事件』というのは、
太平洋戦争下最大のフレームアップ事件……でっちあげ事件として、
特高警察による拷問で、虚偽の自白を強いられて、ないことがあった
ことにされてしまったという事件なんです。

男優3

つまり、なにか犯罪行為があったのではなく、犯罪行為があったのは
警察の方だったという、あり得ない、というか、あっちゃいけない事
件だったんです。

女優2

逮捕された人の数は、ある本によると四八名。

男優2

多くの読んだ本には四九名と書いてありました。

女優1

わたしの調べた本には三〇人余りとありました。

女優3

どうしてこんなにまちまちなのか、主な原因は、戦争が終わった時に、
警察がほとんど資料を焼いてしまったからなんです。記録を書いた
人たちの方も、自分の周辺だけ見ている、事件の全容をわかっていな
かったということもあって……。それで、初めて事件の全容を調べら
れた中村智子さんは『横浜事件の人々』という本の中でこう書いてお
られます。

女優2

（読む）「検挙された人数は三十余名、四八名、四九名とまちまちだが、
こんど名前がわかった人だけで六二名になる。未確認の愛国政治同志
会の労働者二十五名（不起訴）を加えれば、被害者は八十七名になる。」
中村さんがそれ書かれたのって、いつ頃？

男優1

一九七九年だから、事件から三十五年たってるわね。

女優2

ということは、三十五年目にして、やっと検挙者の数がわかったとい
うほど、いい加減な情報しか伝わっていなかったということなんです

女優3

ね。

獄中で死んだ人の数も、二名とか三名とかまちまちで、実際は四名、釈放後すぐ亡くなったおひとりを含めれば五名になります。

男優2

警察が隠したがるのはわかるとしても、被害を受けた側も、なぜそのような状態で放っておいたのか、疑問は尽きません。

女優3

どうしてそのようなことになったのか、事件の経過をたどってみることにします。

2

映像——1942年 内務次官・唐沢俊樹は、こんなことを言っただけだ。

唐沢俊樹

何もない？ 何もないっていうのか、事件になるようなことは何も？ ……君らはそれで給料もらってるのか。仕事をしないで給料を……仕事がないやないで作るんだよ。おこった事件の後追っかけてりゃ済むんだったら、特高警察なんていらなんだよ。おこった事件を叩くじゃなく、事件になりそうな芽を先回りして叩く。事件なんか起こせないようにする。国民にとって見せしめになるようにするんだ。……逮捕歴のあるやつは全部当たったか？ ……何やってるんだ？ それ先だろう。……アメリカから交換船で帰って来た連中は？ ……まだ手がついてないだろ？ ……乗船者名簿はありますって、当たり前だろう。常識で考えたって、スパイの可能性が一番ある連中だぞ。おい、前の交換船の名簿もあるだろう？ ……だったら最近帰って来た中に、ほら、大使館で情報集めてた奴がいただろう、あいつにその名簿を見せてだな、アメリカで左翼運動してた奴を見つけさせるんだ。……いいか。本庁の連中は「横浜は何してるんだ」っていつてるぞ。今朝も大臣に嫌味を言われたばかりなんだ。「唐沢君、閣議で報告できるようにすることは何もごさいません、でいいんだな」って。なあ、おれに仕事をさせてくれよ。

女優3

そんなことを言ったかどうか、確証はありません。ありませんが、横浜事件について書かれたさまざまな資料に、この人・内務次官唐沢俊樹は、事件の黒幕として何らかの役割を果たしていたはずだと登場します。まあ、たしかに、これぐらいのことを言わなければ、ああいうことにはならなかった……だろう……と思います。

映像——1942年9月11日のことを語る川田定子。

川田定子

九月十一日はとても暑い日でした。主人は出勤して、私ひとり家にいました。窓を全部開放って、暑いものですから、くたびれてぼーっとしていたんですよ。そうしたら午後二時ごろ、だーっと五人の男が入ってきたんです。

特高刑事

神奈川県の特高警察だ。川田定子だな。共産党再建運動を首謀したかどにより逮捕する！

川田定子

寿の洗面道具も用意しろと言われて、ああ、主人もやられたのかな、と思いました。なんで引っぱられるのかぜんぜんわからないけれど、アメリカ時代の活動を聞かれるのかもしれない、それならせいぜい三四日で帰れるだろうと思っていたら、そのまま三年間もとじこめられてしまったのです。

映像——同じ時、川田寿は職場で捕まった。

川田寿

ぼくが日銀から川を渡ったところにあった世界経済調査会の資料室にはいって、新聞を手にしてお茶のみはじめて間もなくだった。三人の特高がやってきた。

別の特高刑事

ちよっとお伺いしたいことがあるので、横浜まで同行ねがいたい。勤め先をあまりお騒がせしないように、ちよっと横浜まで外出すると言ってくださればいいでしょう。

川田寿

なんのために？ どのくらいの時間ですか？

別の特高刑事

ちよっとしたことですが、ここでは具合が悪いので。

川田寿

と言っ、ものやわらかに丁重をきわめたものだった。断ったりして、いたくもない疑いをかけられてもと思って、昼食でもつきあうくらいの気もちで、横浜水上署まで同行したわけだった。

川田定子

加賀町署の留置場にほうりこまれて一週間、何の取り調べもなく、一週館目にひっぱりだされて連れて行かれた部屋には「紳士」が十人くらいずらりと並んでいまして、あんまり大勢いるので、きまりがわるくてちよっと下を向くと、

特高刑事

顔を上げる！

川田定子

という怒声と同時に、いきなりみんなの前でピシャピシャッと頬をひどくぶたれました。これが最初の暴力でした。その日は顔見世に引き出されただけで、そのまま留置場に戻されましたが、生まれて初めて受けたビンタの痛さと、大勢の男の前でぶたれた屈辱感で、興奮して眠れませんでした。

女優3

それは序の口でした。定子さんは、戦後になって横浜事件関係者が拷問した特高を告訴した時、こういう口述書を記しています。(読む)

「私共は昭和六年より十六年まで約十年間、米国に於いて労働運動に参加した経歴ある理由を持って、帰国後も共産主義運動に関係あるものとの嫌疑のもとに検挙されました。

然し、特高警察は何らその根拠を突き止め得ず、米国に於ける私共の労働運動を、日本の治安維持法違反に適条せしめ……つまり、アメリカでやったことを日本の法律で……法的に罰しようとの苦肉の策を練り上げて、三ヶ年の長期間を、もっとも野蛮な警察と未決に封じ込めました。その間の彼らの拷問は、言語に絶する暴力と、女性として耐え得られざるへはずかしめとを拷問手段としました。」

川田定子

最初は松下がやっただんです。痛いんですよ。むちが交叉するところがあるんです。そこがすごく痛いんです。坐らせておいて何時間でも叩くんです。昼間はみんなが見るので、夜やるんです。「こういうことをしただろう」「寿がどういふことをやったか」と責めるけれども、何にも事実がないので「知らない」というと、ぶったり蹴ったりしました。ふたくちめには、「寿はもうとっくにぜんぶ白状したぞ、もうさっぱりして拘置所へ行ってるよ。お前だけだよ、意地をはってるのは」と精神的にがっくりさせるようなことを言いました。主人にも同じようなことを言って責めたわけですが、私は主人がそんなウソの自白をするはずはない、がんばっている、と信じていました。いちばんひどいのは松下でした。私の前に坐って、コーンコーンとこうもり傘の先のがったところで突くんです。なわで吊り下げられて叩かれたこともありました。今日は殺される、なんとも思いました。「お前ら国賊は殺した方が国のためなんだ」としよっちゅう言っていました。あるときなど、みんなでうなぎ丼を私の目の前でうまそうに食べて、「精をつけて、いまからお前をやってやるぞ」と言い、食べ終わってから大勢で私をいじめました。私、窓から飛び降りて死んじゃおうと思いましたが、そうしたら自殺するとわかったのか、入口にバリケードを作って、窓も

閉めて、後手にしぼって、椅子に動けないようにくりつけられました。叫び声が大きいので、私の調べが始まったというところ、警察の人が、特高がひどいことをすると、みんな見に来るんです。口を手拭でしぼって、声が出ないようにされました。拷問は板の間でしたが、失神から意識が戻った時は、畳の部屋に寝かされていました。もう殺される、と思ったらずーっと失神してしまっただけですが、彼らは「殺したって平気なんだ」といつも言っていました。やはり殺してはまずいのですね。殺さないで、殺す寸前までいかに苦痛を与えるかがテクニクなんです。

女優3

(読む)「取り調べに際しては約一年間にわたり、常に殺人の意を表明し、脅迫し、棍棒、竹刀ベラ……竹刀をバラバラにほぐしたものだそうです……麻綱、竹刀、剣、帯革……ベルトですね……靴、手錠、火箸等を用い、土下座せしめて、膝、ももを出血するまで打ち続け、失神に陥りたること数十回に及ぶ。時には「今日は殺す」と怒号して両手を背にまわして、足を合して各々を麻綱にて縛り、二名にて告訴人の身体を弓型に吊り上げ、背部を他の一名が靴ばきのまま蹴り、さらに乗り上げ、時余に亘りて強迫を続け、終に失神せしめられること数回なり。」

ご主人の川田寿さんの口述書です。

川田寿

彼らの目的が、ぼくにアメリカ経由のコミンテルンの共産党再建指令を持ち込んだと言わせようとしているのだとわかったのは、だいぶたってからでした。そんなことはぜんぜん知らんというところ、とぼけやがる、といってすぐくやられました。この点をピークとして、彼らとの永い戦闘状態が続きました。しかしこの点では結局彼らの敗北に終わりました。しかし、警察での一年間、よく命がもったものだ、今に至るまで悪夢におそわれるほどです。だが、ぼく個人はどうされてもいいが、友人や兄にまで迷惑をかけたと思うと、ぜったいに許せないですね。

女優3

川田夫妻が迷惑をかけたという人は、七名。その中には、久しぶりに出会って名刺交換しただけという人までいましたが、皆捕まって拷問を受けています。うち一人、世界経済調査会の高橋善雄さんは獄死されたのですが、その高橋さんの線から『ソ連事情調査会事件』がでっちあげられ、そこから満鉄調査部の平館利雄さん、西沢富夫さんが逮

捕され、その二人の押収品のなかにこんな写真がありました。

4

映像——1枚の写真を巡る、唐沢俊樹と松下特高課長の対話。
映像——泊の記念写真。

唐沢俊樹
何だこの写真は？

松下特高係長
満鉄の平館、西沢が持っていたもので、何か使えないものかと思って。

唐沢
真ん中は細川嘉六じゃないか。

松下
そうなんです。ですから……。

唐沢
何の写真か、二人には聞いたのか？

松下
細川の招待で、富山県の泊に行ったんだそうで……。

唐沢
周りは誰だ？

松下
細川担当の編集者たちで、中央公論、改造……。

唐沢
ちよつと待て。

松下
は？

唐沢
細川嘉六が、今どこにいるか、知ってるか？

松下
どこです？

唐沢
世田谷署のブタ箱だ。

松下
は？

唐沢
おまえ、警視庁と喧嘩する気あるか？

松下
……あります。

唐沢
細川嘉六が、なんでつかまったか、わかるか？

松下
あれですか？ 改造八・九月号の論文、「世界史の動向と……」。

「と日本」。情報局の検閲は通ったのに、雑誌が出てから陸軍報道部長の谷萩大佐がいちやもんをつけた。それもよりによって「これは共産主義宣伝でしょう。手ぬかりですな」という言い方だ。これで情報局と陸軍報道部との間は一触即発。とぼちちりが来ないうちに、警視庁はあわてて雑誌を発禁にして、細川嘉六をしょつ引いたというわけさ。谷萩大佐のいう「共産主義宣伝」を証拠立てなければならんからな。

……で、どうなったんです？

どうにかなつてりゃ、こんなこと言い出しゃせんよ。あのがんこじじい。八か月になるのに尻尾もつかませやしない。だから、この写真が使えるんじゃないかというんだよ。いいか、これは「共産党再建会議」

松下
唐沢

の記念写真だ、ということにするんだ。すぐ警視庁へ行って、細川嘉六の身柄を横浜へもらい受ける。

松下

しかし……。だから喧嘩する気があるかというんだ。

唐沢

……。

いい。あとで、電話しといてやる。そして写真に写ってるやつを全員逮捕するんだ。

松下

満鉄の平館と西沢は、すでに『ソ連事情調査会事件』で、逮捕済みで。

唐沢

じゃあ、あとの四人か、撮った奴入れて五人か。それで、「お前たちは泊で細川嘉六を首謀者として、共産党再建のための会議を持っただろう。証拠はこれだ」というんだ。うまくすれば、それぞれの組織に広げられるかもしれん。神奈川の特高は眠ってたんじゃないってところを見せてやれ。

松下

はい。

5

映像——1943年5月26日 泊会議?の全員逮捕。

特高の一人

木村さん。おはようございます。木村さん。

木村亨

(立つ)

特高の一人

木村亨。中央公論出版部の木村亨だな。神奈川県の特高警察だ。治安維持法違反容疑で逮捕する!

別の特高

相川博。元改造社の相川だね。神奈川の特高だ。治安維持法違反容疑で逮捕する。

また別の特高

改造社の小野康人だな。神奈川の特高だ。治安維持法違反容疑で逮捕する。

特高の一人

加藤政治。東洋経済新報社の加藤政治だな。治安維持法違反容疑で逮捕だ。

加藤政治

(立つ)

別の特高

満鉄調査部の西尾忠四郎だな。治安維持法違反の容疑で逮捕する。

映像——木村亨の語る、柄沢警部補の拷問。

木村亨

五月二十六日の夕刻である。山手警察署の二階の特高の取調室へ引き出されたぼくは、入口に近い板の床にひきすえられるように土下座させられた。

人形の木村亨を土下座させ、手に手に獲物を持って取り囲む特高たち。

木村亨

どやどやとぼくを取り囲んだ特高刑事の面々は五、六名。手に手に木刀やほぐした竹刀や壊れた椅子の足などをぶらさげて、土下座したぼくをにらみつけた。取り調べ主任の柄沢警部補が目くぼせすると、いきなりその中の二、三名が、ぼくの両手を後ろ手に縛りあげて、手錠をかけた。柄沢が近づいてきてぼくの顔を両手でピシヤピシヤと殴りつけながら、口を切った。

柄沢

この野郎！ よくも凶々しくこの聖戦下に生き延びていやがった。貴様のような共産主義者は生かしちゃ帰さんからそう思え！

木村亨

その叫びを合図に、彼らは一斉にぼくになぐりかかってきた。頭といわず胴といわず、足といわず背中といわず、ところかまわず殴る蹴るの暴行がはじまったのである。

人形の木村亨に殴る蹴るの暴行を加える特高たち。

木村亨

「ぼくは共産主義者ではありません。」

柄沢

何だと？ 往生際の悪い奴だ。ここは東京と違うぞ！ 小林多喜二の二の舞を覚悟しろ！

いよいよ激しく殴り、蹴る特高たち。その勢いで横倒しになった人形の顔を靴で踏みつける。

木村亨

しばらくの間そうしてぼくを揉みくちやにしておいて、意識もうろうとしてきたところへ、

柄沢

この野郎、面倒をかけやがる！

柄沢は、用意したわら半紙に「私は共産主義者であります」と書く。

木村亨
柄沢は、用意したわら半紙に書きなれた手つきで「私は共産主義者であります」と書き、
柄沢
おい、手錠を外せ。……さあ、ここへサインしろ！

有無を言わず手をつかんで拇印を押させる。

木村亨
有無を言わず手首をつかんで名前を書かせ、さらに右手の人差し指を握り、指の腹に朱肉をつけて、拇印を押させるのである。
柄沢
これでよし。この野郎、あとで文句を言ってみろ。ほんとに殺してもかまわんのだから、そう思え！

7

映像——木村夫人は中央公論社に行き、藤田親昌編集長に相談した。

木村夫人

あの……。

藤田親昌

ああ、木村君、どうしました？ 何か休んでるって、出版部から……

木村夫人

藤田さん、何か知らないかって、さっき……。

藤田

実は、警察に……。

木村夫人

え？
連れて行かれまして、どうしたらいいものかと……。

藤田

どこの警察ですか？

木村夫人

神奈川の特高だと言っていました。

藤田

いつ？

木村夫人

昨日の朝、六時頃でしたか。申し上げた方がいいもんかどうか、わかりませんで……それで昨日はとりあえず欠勤とだけお電話させていた

藤田

だいたんですが、やはりこれは申し上げないわけにいかないと……それで……多少は事情もお分かりかと思って、まず前の部長さんに……。

木村夫人

それはどうも……いや、しかし……驚いたな。

藤田

何があったんでしょうか？ 思い当たるような何か？

木村夫人

社の方ですか？ いや、それは、うちと『改造』がにらまれてるのは確かですから、あると言えはありますが、しかし、差し迫って発

藤田

は確かですから、あると言えはありますが、しかし、差し迫って発

木村夫人

社の方ですか？ いや、それは、うちと『改造』がにらまれてるのは確かですから、あると言えはありますが、しかし、差し迫って発

藤田

は確かですから、あると言えはありますが、しかし、差し迫って発

禁になっていないものはないし、「撃ちてしやまん」の標語問題も、畑中編集長からぼくにスイッチしたことで、当面回避できてるし、『中央公論』の新しい編集方針もおおむね了解してもらってますから、今はこれといった火種はない状態だと……。強いて言えば、木村君が企画した『支那問題辞典』を書かれた細川さんがつかまってることですが、しかしあれは警視庁ですから、神奈川県じゃありませんから、まあ、関係はないだろうと……。ないんですか、そちらには、思い当たるような何か……？

木村夫人　それが何も……前歴があると言っても、学生時代のことですし。何があったんだろう。

藤田

映像——そこへ通りかかった社長・嶋中雄作は……
嶋中社長が通る。

藤田　あ、社長。出版部の木村亨君の奥さんです。

嶋中　ああ、嶋中です。

木村夫人　木村がお世話になりました。

嶋中　いやいや。今日はまた……？

藤田　実は、昨日、木村君、警察に持って行かれてまして……。

嶋中　なに？

木村夫人　はい。

嶋中　特高か？

木村夫人　はい。

藤田　それで、その報告とご相談ということで、奥さん、お見えになったんですが。

嶋中　何かやったのかね。

藤田　それが、思い当たることは、まったくないので、仕事からみで何かあったんじゃないかと、それもあって、今いろいろ、情報を……。

嶋中　なるほど。……藤田君は、今はもう部は変わったけど、ついこないだまでの上司だ。よくお話を伺って、相談に乗ってあげなさい。

藤田　はい。

木村夫人　おそれいます。

嶋中　奥さんも、気を落とさないで。もし面会にでも行けるようなら、ぼくが案じていたと伝えてください。

木村夫人　はい。ありがとうございます。

嶋中　じゃ、ぼくは会議があるんで。

嶋中社長は、行きかけて、離れた所から、

嶋中 藤田君、ちよつと。

藤田を呼び寄せて、耳元で、

嶋中 奥さんに言つてだな、辞表を書いてもらえ。

藤田 ええ？ まさか……。

嶋中 特高のご厄介になるような奴が、うちの社員であつてみる、中央公論社はつぶされてしまふぞ。

藤田 ………。

嶋中 いいか。辞表を書くまで帰らすな。

藤田 ………。

嶋中 社員みんなが、路頭に迷うかどうかの瀬戸際だ。わかつたか。

藤田 ……はい。

8

映像——木村亨が語る、森川警部補の拷問。

森川警部補

貴様の取り調べはおれがやることになった。いいか、おれの取り調べは、他の奴と違って、少々手ごわいからそう思え。貴様のような共産主義者は殺してもかまわんのだ。さあ、貴様らが泊でやったことを、正直に申し上げろ。貴様らは泊で共産党の再建会議をやつたらう！
いえ、泊へ行ったのは、細川さんの出版記念会のためで……。
うそをつけ！

木村亨

森川 本当です。東洋経済新報社から出した『植民史』の印税が入つたので、かねて世話になつてゐる各社の編集者にご馳走したいからと……泊は細川さんの郷里で、うまい魚が食えるし、酒も呑めるからと……。
やれ。

森川

特高刑事たちが、人形の木村亨に襲いかかる。

木村亨

刑事たちは、いきなりぼくの上着やズボンを脱がせ、下着だけでむきだしになった足で、丸太を並べた上に正座させた。

人形の木村を丸太を並べた上に坐らせる。

木村亨

「あ、痛い！」

特高の一人

この野郎！ これしきのことで痛がるんじゃないやねえ！ もっと痛い目にあわしてやる。

いいながら、木村の膝の上のつて、土足で踏みつける。

木村亨

（悲鳴とともに）いくらせめても事実は事実だ。泊旅行は出版記念会だ。共産党の会議なんかじゃない。

森川

この野郎！とぼけるんじゃないやねえ！ 泊は立派な共産党再建の会議なんだ。貴様がまだそんな寝言をいうなら、正しい答えを言わしてやるから覚悟しろ！

刑事たち、それぞれ責め道具を振りかざして、所かまわず木村の人形に殴りかかる。「この野郎！ この野郎！」「これでもか！」などと口々にわめきながら。

木村亨

責め道具をふりかざして、またぞろぼくの頭から背中、首、胴、腕と、ところかまわずなぐりかかってくるので、とうとうぼくは、意識を失って倒れてしまった。

動かなくなった人形の木村に、バケツの水をかける刑事たち。かすかに動いた気配に、

森川

気がついたか。こいつ、いい度胸だ。一年ぐらい中で考えておけ！

9

映像——中村智子の取材に応じる木村亨。

中村智子

記録によると、こうした尋問が五月二六日、捕まった日の夕方と、二七日の朝、三十日と続いて、あとは八月まで放っておかれますね。

木村

ええ。

中村

その間に新井義夫さんと、中央公論の浅石さんがつかまりますね。そ

木村　　これはご存知だったんですか？

新井さんという方は、ぼく存じ上げなくて……特高にも、新井とどうしたと責められました。そういう人は知りませんとしか言いようがなくて。浅石君は会社では一期下の同僚で、細川さんのところに入ります。一人でしたが、結核で療養中で、細川さんも泊には誘わなかったんです。ですから、森川警部補に……。

森川　　この野郎！ 貴様の会社には、浅石という立派な同志がいるじゃないか。浅石も泊へ行くことになっていたそうじゃないか。よくも黙っていやがったな！（なぐる）

木村　　と言われたときはショックでした。ぼくが、名前を出さないと、頑張ってきた友人の一人でしたし、特に病気が病気ですから、捕まれば無事ではいられないだろうと……。だからあいつの名前だけは絶対に出すわけにいかんぞと……。そう思ってた矢先の逮捕ですから。

中村　　浅石さんが亡くなったのは、獄中でした。

木村　　監房の中で、喀血した血にまみれて死んでいたそうです。

中村　　案じていた通りになってしまった……。

木村　　そうなんです。

中村　　実は、横浜事件のことを調べたいと思って、中央公論社内で聞き込みを始めましたら、ある人に言われたんです、「やめた方がいいんじゃないか。木村君あたりが傷つくよ」って。

木村　　そうか。そんなことを言ったか……。

中村　　まあ、中央公論の逮捕第一号ですから、後から捕まった人から見れば、自分が捕まったのは、先に捕まった誰かが名前を出したからだと言いたくなるのは当然と言えば当然かと思うんですが……。

木村　　学生時代、共産青年同盟にいた友達に言われたんです。捕まることがあったとしても、名前だけは出すなよって。それだけはぼく、守ってきたつもりで……。ですから、恥ずかしいことに拷問に屈して、奴らの作文は認めてしまいました。名前だけは……。

中村　　三十五年もたっているのに、まだそんなおっしゃり方をしなければならぬ。つらいですね。

木村　　つらいです。ええ……。

中村　　浅石さんが捕まったのは、木村さんは、どの線からだと思われませんか？

木村　　推測でしかないのですが……昭和塾がらみではないかと……。

映像——昭和塾。

中村

昭和塾というのは、近衛文麿の片腕といわれた後藤隆之助を塾長に、一九三八年に、国家に有為の人材を育成しようとして作られた教育機関ですが、講師の一人の尾崎秀実がゾルゲ事件で逮捕されたのがきっかけで、三年で姿を消します。浅石さんは塾生のなかで中心的な役割をされていたようです。

中村

そういえば、昭和塾グループは横浜事件の中では最大の、一五名の逮捕者を出していますね。それは前の首相の近衛派の影響力を排除しようという東條首相の指示だったんではないか、という人がいますが……。もしくは、それが東條の意向だろうと、忖度して、特高が先走ったかですね。近衛内閣が出来た時は、近衛新体制ということで、戦争拡大に歯止めがかかるんじゃないかと、期待する人が多かったから。

中村

改造の青山さんが捕まった時に特高に言われたそうですね、「おれたちは重臣を逮捕することだって出来るんだぞ」って。その頃重臣といえど前の首相近衛文麿他の三名しかいませんでした。特高は近衛文麿を逮捕することまで考えていたんですね。

10.

映像——嶋中は藤田とともに、改造社の青山に海軍とのとりなしを頼む。

青山憲三

改造社の青山です。

嶋中

嶋中です。

青山

今は出向で海軍報道部嘱託の仕事をしています。

嶋中

そうなんですってね。それで海軍報道部へのパイプを、藤田がお願いしたと聞きまして、やはりこれはきちんとしてご挨拶もし、お願いすべきところはお願いした方がいいと、こうして伺ったわけで……。

青山

恐れ入ります。藤田さんから、中央公論社は危殆に瀕している、何とか海軍報道部につないでもらえないか、というご相談があつて、課長の栗原大佐、雑誌担当の浜田少佐と高戸主計中尉に会っていただくよう段取ったのですが、今日になってお三方の都合がつかなくなつて、でもせっかく笹の雪を押さえて、お店の方でも材料がない中工面して用意して下さったものを、流すのも何だから、お三方の代わりに私が

お話を伺ってと……そういうわけで……。

藤田 ありがとうございます。どうなんでしょう。海軍のお三人、まさか陸軍報道部に気を遣ってということは……。

青山 それはないでしょう。あったところで、我々にはどうしようもない話ですから。

藤田 それはそうですが……。

嶋中 社長は、お元気ですか？

青山 元氣です、と申し上げたいんですが、例の細川さんの論文……。

嶋中 『世界史の動向と日本』？

あれで陸軍報道部にいじめられましたして、大森編集長を更迭せざるを得ないところまで追い詰められまして、編集部そっくり交代ということに……私の海軍出向もその一つなんですが、このバタバタで、社長すっかり気落ちしております……。

嶋中 うちと一緒だ。うちも谷崎さんの『細雪』が戦争に対して傍観的だといつてとつちめられ、岸田国土の『かえらじと』が軍を冒瀆するものだといじめられ、おまけにうちは例の「撃ちてしまむ」を表紙に刷らなかったという問題で、私と編集部あてに陸軍報道部から絶縁状を突きつけられる羽目になりまして、さすがに畑中編集長の首を飛ばさざるを得なくなつて、藤田君に代わってもらつたんですが、危うく雑誌をつぶされるところで、参りましたよ。

青山 うちもまったく同じような状況ですね。あきらかに陸軍報道部は改造と中央公論を目の敵にしている。

藤田 酒の席ですが、中央公論や改造なんて潰れた方がいいんだ、と放言した大佐もいたようですね。

嶋中 海軍はどうなんですか？ 我々としては、海軍と陸軍、両報道部の足並みがそろわないことで、振り回されることも多いんですが、逆にそこが付け目というか……。

青山 陸軍のやり方を批判的に見ている人も、海軍にはいますんでね。陸軍にブレーキをかけるのが、海軍報道部の役割だと思つている人も、たしかにいますと思うんですが……。

嶋中 それを当てにして、お話させていただくんですが……正直言つて陸軍報道部とは、先方からの出頭命令もあつて、何回も折衝して、雑誌編集の理念と具体策について説明させていただいたんですが、わかつてもらえず、このところ頭を叩かれつ放しの状態で……。これでは、雑誌・出版に携わる者として、まことに不甲斐ない。いうまでもなく、真実を追求してそれを伝える意欲と批判精神の無くなったジャーナリ

青山

ズムは、死骸も同様だと思っんですよね。ごもつともです。

嶋中

どうだろう。私のこういう雑誌経営者としての信念を、海軍報道部の中枢の皆さんにお伝えいただいたら、分っていただけるだろうか。それをもってすぐ陸軍の方に圧力をかけて欲しい、などというつもりはありません。ただ、陸軍と海軍の我々に対する認識がまったく同じということでは、嘆かわしい、恐ろしい結果が招来されると思うので。

青山

海軍は理解します。大丈夫です。ことに新任課長の栗原大佐は宴会でも芸者のいる席には出席しないよう申し合わせるほどの謹厳な方で、戦果の発表も嘘のないありのままの数字が報告されるようになりまして……ま、それも軍令部の上の方からの干渉がなければの話ですが……栗原大佐に関しては、信頼の置ける軍人だと思います。で、私は社長に、栗原大佐とお会いになることをお勧めします。私が段取りますので。

嶋中

ありがとうございます。

藤田

ありがとうございます。よろしくお願いします。それにしても陸海軍両報道部の方針の違いには振り回されますね。これでまた警察が分からない動き方をするし。

青山

それぞれが、戦果を競い合っているんでしょうな。迷惑な話です。

藤田

今、改造では、横浜に連れて行かれてるのは、二人ですか？

青山

ええ、相川と小野。中央公論は？

藤田

木村と、つながりが良く分らないんですが、浅石が……。

嶋中

何を企んでるんですかね、横浜の特高は？

青山

まったくわかりませんね。初めは細川さんのつながりかと思ってましたが、満鉄調査部も捕まっていますし、最近では昭和塾関係にもひろがつているようで、まったくわかりません。

藤田

どうなんでしょう。初めは、こりゃ何かある、木村の奴何をやりやがったんだ、と思っていました。ひよつとしたら、何も無いんじゃないか、何もない所に奴ら事件を作ろうとしてるんじゃないか、そんな気がしてきましてね……。

青山

あり得ますね。

嶋中

だとしたら、いよいよこれは、尻尾をつかませないように、口実を与えないようにしなければ……。

藤田

そうです。

嶋中

頼りにしてまずよ、海軍報道部。

青山

は……はい。

青山

海軍報道部の栗原大佐に、嶋中社長と会っていただくという段取りは、高戸中尉に一任しましたので、実現したはずですが、結果については聞いていません。というか、その後の状況を見れば、何の効果も得られなかったのはあきらかか、我々の認識が甘かったというか、悪あがきに過ぎなかったというか……そのうちに我々自身も逮捕される羽目になって、それどころではなくなってしまうんですが……。

11.

映像——1944年1月29日の逮捕者

(改造社) 水島治男・青山憲三・小林英三郎・若槻茂

(中央公論社) 小森田一記・畑中繁雄・藤田親昌・沢起・青木

滋

映像——藤田雪子はいわれるままに辞表を出したのだが、

藤田雪子

社長さん。お久しぶりです。このたびは藤田が……。

嶋中

ああ、雪ちゃん。大変だね。

藤田雪子

いろいろご心配かけまして。辞表は今、おっしゃったように逮捕前日の日付に改めてお届けしましたから……。

嶋中

面倒かけてすまなかったが、雪ちゃんも社員だったから、わかってもらえるよね。

藤田雪子

はあ、それは……。あの、こういう場合、社として何か対策をとっていただけるとか……ないんでしょうか？ 御存知のように、子どもはまだ小さいですし。

嶋中

わかるけどね、社の方針として、こうした事件には関係しないことにしているから……。それに大変なんだよ、藤田君だけじゃないんだ。

一挙に五人だよ。小森田君は今出版会だけど、小森田君だろう。畑中君だろう。沢君だろう。青木君だろう。その前に和田喜太郎君が捕まってるから六人だ。木村浅石を入れたら八人だ。その穴埋めだけでも大変なんだよ。そうでなくとも軍部は中央公論、改造を目の敵にして、つぶす口実はないか、虎視眈々と狙ってるんだ。口実を与えることは出来ないんだ。わかってもらえるだろう。あんたも社員だったんだし、社内結婚第一号だ。会社をつぶすわけにはいかないんだよ。

藤田雪子

……失礼します。

映像——特高は富山県泊まで出張尋問した。紋左旅館の女将・
 柚木ひさ。

柚木ひさ

細川君ちや私の同級生ながです。ええ、幼馴染というがけえ。その細川君から頼まれて、法事があつて帰ってくんがでえ、そのついでに、世話になつとる東京の若い人たちに、魚をご馳走したいから……東京は食糧事情が悪くて、ろくなものが食べられんから、富山のきときとの魚を存分に食べさせてやってくれいうて、頼まれたがやちや、そういうことならいうて最高のご馳走を用意して接待したと、そういうわけながです。

特高の一人

嘘をつけ！ あれは日本共産党再建のための準備会議だった。そうだろう。

柚木ひさ

なあん、あたしも時々お酒を届けるついでにお酌をしたりしとったけど、ずっと宴会で、共産党の会議だなんて、そんな……。

特高の一人

じゃあこの写真は何だ？

映像——泊会議と言われている写真。

柚木ひさ

それはうちの、紋左旅館の中庭で、朝ご飯の後、お仲間の一人が持つとられた写真機で記念に撮った写真やちや。決してそんな秘密会議の写真じゃないが、第一そんな秘密の会議なら、わざわざ証拠写真なんか普通撮らんと思うがやちや。

特高の一人

カモフラージュのために撮るといふことだつてある。

柚木ひさ

なんせ、写真を撮った後は、釣り船を頼んで皆さんで海へ行かれたんがやから。そういう楽しい会だったがです。帰ってこられてからは飲んだり食ったりし放題の二泊三日だったがです。

特高の一人

嘘をつくな！ この写真に写つとる連中みんな、あれは共産党再建のための会議でしたと、認めているんだ。

柚木ひさ

細川君もげがや？

特高の一人

そりゃ知らんが……。

柚木ひさ

何で皆嘘をつくがやろう。

特高の一人

嘘をついてるのはお前の方だ。神奈川の特高をなめるんじゃねえ。

柚木ひさ

なめてなんて、そんな……ありのままを正直にいうとるだけで。

特高の一人

いい加減に認めたらどうなんだ。あれは、共産党再建のための会議だったんだろ。

柚木ひさ

なあん、あれは細川君のお世話になった若い友人を集めての出版記念会で……。

特高の一人

いい加減にしろ！ もう三時間だぞ。

柚木ひさ

三時間だろうと、何時間だろうと、嘘つくわけにちやいかんちゃよ。信用できんがなら、三笑楼のおっじゃに聞いてみられ。あそこでも同じように宴会開いとったっていうからア。平柳梅次郎ちゃ、子どもの頃細川君と隣同士だったア、やっぱり幼馴染ながやちゃ。

映像——三笑楼主人・平柳梅次郎。

特高の一人

平柳梅次郎。嘘をつくな！

平柳梅次郎

嘘なんてついたらんちゃア。細川さんのオ嘉六さんはア、そんな悪いことをオ企むような人じゃないちゃア。融通のきかんくらいいいいなア、いちがいがいなア人やちゃ。隠れて何かするような人じゃねえちゃ。

特高の一人

証拠はあがってるんだ。参加した連中がみんな、はいあれは共産党再建のための謀議でしたって白状してるんだ。そうだったんだらう。三笑楼で開かれたのも、その秘密の会議だったんだらう？

平柳梅次郎

やけどオ、芸者を揚げてやる秘密会議なんてあるがかね。

特高の一人

芸者を揚げたのか？

平柳梅次郎

そんなが、芸者衆頼んでどんちゃん騒ぎやちゃ。ありゃああんたどう見たって会議なんてもんじゃないちゃ。

特高の一人

その芸者を呼べ。

平柳梅次郎

呼んだって一緒やと思うがやけどねエ。

特高の一人

いいから呼べ！

女優2

芸者衆が呼ばれ、釣り船の船頭まで呼ばれて、いろいろ調べられたそうですが、特高刑事たちの泊出張は、何の成果もなかったそうです

13.

映像——尋問が終わると手記に進む。青山鉞治の場合。

青山

私がいっただん降参してしまつと、つまり柄沢警部補の言いなりに共産主義を信奉し、共産主義活動をしたことを認めると、それで横浜の特

女優3

高がわたしを検挙した目的の大前提はできあがった。あとはそれを裏付ける、いわば各論の工作することになる。それがわたしの「手記」であり、それにもとづいて一問一答式につくりあげられるのが「警察調書」であった。この段階になると、もう拷問の恐怖はなかった。私は毎日、朝の九時頃から夕方五時過ぎまで、みっちり手記を書いた。私の手記がある程度まとまると、柄沢警部が眼を通して、書き足りない部分にダメを出した。書き足りないというのは、彼らに言わせると共産主義的理論や意識が低い、もっと強烈な意識と感情の昂揚を文章に表わせということであった。たとえば家庭環境の項目でも、私が「急に母のいなくなった家のなかは寂寞として悲しかった」と書けば、柄沢は寂しく悲しいだけじゃなからう、「このような歪んだ家庭の空気のなかで少年の私はすでに運命を呪うような反逆的感情を植えつけられたのであります」といった調子に加筆訂正を強要した。つまり特高としてはしゃにむに、私たちが鋼鉄の共産主義意識を抱持しているかのように、あらゆる角度から固めあげねばすまなかったのである。

青山さんの書かれた、手記についての記録です。それぞれの生い立ちから家庭環境、教育環境、職場環境について書き、自分はいかにして共産主義者になったか、そしてどういう風に犯罪行為が行われたかを書くわけです。これは木村さんが書かされた手記です。

映像——木村亨の場合。

木村

「昭和十九年四月二十八日

手記

木村亨

私ハコミンテルン並ビニ日本共産党ノ任務目的ニ副ウタメニ活動ノ遂行ヲ意図致シマシテ一方中央公論社ニ於イテ左翼的啓蒙活動ヲ展開スルト同時ニ他方 昭和十五年末頃ヨリ 共産主義者細川嘉六ヲ中心ニ私ヲ始メトシテ相川博、加藤政治、浅石晴世、小野康人、新井義夫等ノ共産主義者ガ結集シテ共産主義グループヲ結成シ 前記ノ意図、目的ヲ以テ現情勢ニ対処ス可キ当面ノ任務、方針ヲ協議決定シ、三々五々相会シテハ客観情勢ノ分析批判、革命ノ展望等ヲナシ、特に私ハ右ノ加藤、浅石ヲ誘ツテ国内右翼団体利用方策ノ検討ノ為メニ日本右翼運動史研究会ヲ開催スル等相当活発ナ活動ヲ展開シテ参ツタノデアリマス」

中村

コミンテルンってまだあったんですか？

木村

ありませんよ。一九四三年の五月にはもう解散していたそうです。

中村

これをお書きになったんですか？

木村

書かされるんですよ。どうしても書けないと、人が書いた手記を書き写させるんです。それでも書かないと、特高刑事が書いて、強制的に署名をさせ、拇印を押させるんです。

中村

これもそのようにして書かされたわけですね。

木村

「昭和十七年七月五日頃 富山県泊町ニ於テ 旅館紋左 料亭三笑楼 両会議ノ開催ニ至ツテ……細川グループハ所期ノ如ク飛躍的ニ拡大強化セラレ、急速ニ 所謂党再建準備組織ヲ結成確立スルニ至ツタノデアリマシテ 今ヤ極度ニ衰弱体化セル日本共産党勢力ヲ挽回シ、再ビ之ヲ盛り立テル有力ナル支援組織タラシメルト共ニ、ヤガテハ其ノ発展強化ニ伴ヒ 自ラヲ日本共産党ノ中心的勢力タラシメント意図シタノデアリマス」

中村

これで泊会議はあったことにされてしまったんですね。

木村

弱かったんです。特高の作文を最後まで否定し続けたのは、誰一人いなかった、頑張ったのは細川先生だけでした。

14.

映像——青山の耳にした証人に対する尋問。

女優3

手記を書かされたのは、被疑者だけではありませんでした。改造の青山さんが、こんな報告を残しています。

青山。

私は、七月に入ると間もなく加賀町署から大岡署へ身柄を移されたが、その移管の数日前だったから六月末と記憶する。

いつものように川口刑事の監視のもとに手記を書いていると、ドアを隔てた隣室から、

男の声

嶋中、どうなんだ、嶋中！

青山

と、鋭く問いつめる声が響いてきた。私は手記のペンを止めて耳をすました。

男の声

認めるのか認めないのか、どうなんだ！

青山

とがった声は、ますます烈しくなった。

竹刀の音。

青山

声にまじって、ピシャ、ピシャと体をたたく音もした。私は体験からそれが竹刀の音であることを知った。三カ月前の拷問が思い出されて、たちまち私の気持はまた痛みだした。

「だれですか。……嶋中ときこえたようですね。」

中央公論社長の嶋中雄作に違いないと思った。川口はゆるく首を振って、あちらの部屋のことなど考えてはいかんという目つきをした。それはしかし、嶋中雄作を否定する表情ではなかった。

「やっばりそうですか。中央公論の社長までがね……。」

川口

「証人として召喚されたのだよ。」

青山

川口刑事は、言ってはならぬことを告げるかのように体を乗り出してささやいた。

「でも、あの音は竹刀でなぐる音じゃないですか。」

刑事はふっと黙ってしまった。肯定も否定もしない。急にもうそれにはいっさいふれたくないというきびしい眼で、私に手記をうながした。私はペンを握り直してザラ紙を見つめたが、こころは隣室にあった。

証人調べで暴力を振るうなどということは考えられなかった。無法もはなはだしい。だが、思い直してみれば、この事件のすべてが無法であった。法を守る一片の良識もないではないか。

次の朝、どういう都合だったか、手記を書く部屋を移され、そこはきのうの嶋中社長の部屋であった。そこで私は意外なものを発見した。

それは一枚の書き損じの紙片であった。なにげなく開いてみると、「中央公論社の革命的伝統について」という鉛筆書きの一行が眼に入った。そうか、きのう嶋中社長はこれを承認せよと攻められていたのになにがいない。中央公論社が革命的伝統をもつならば、同然に改造社にも「革命的伝統の名誉が押し付けられるにきまつている。嶋中社長が喚問されたのだから山本社長も当然調べられている。「改造社の革命的伝統について」 私はその文字を頭の中で何度も書いてみた。そして、社の最高責任者が、この華々しい反国家的性格を承認するからには、陸軍報道部の言い方をもってすれば、「実力を発動」してもかまわないし、横浜の特高の口癖で言えば、「地上から完全に抹殺してもかまわない」ということになる。勇大なるデッチあげの大詰めが読めた。

映像——内閣情報局 橋本政美。

女優3

一九四四年七月一日、内閣情報局第二部長・橋本政美は、中央公論社、改造社の代表を呼びつけました。

橋本政美

『中央公論』並びに『改造』は、営業方針において戦時下国民の思想指導上、許しがたい事実がある、と閣議で判断するに至った。よって、情報局は中央公論社、改造社、両社の自発的廃業を懲憊するものである。以上。……わかったか。これは解散命令だ！ 可及的速やかに解散せよ！

映像——昭和一九年七月十一日新聞各社は、中央公論社・改造社の自発的廃業を報道。

藤田親昌

昭和十九年七月のある朝のこと——六時、私は横浜山手警察署の監房に盤回しされていたのだが、その鉄格子の向うから、山手署の特高主任が何か低い声でささやいた。

「えっ」

問いかえした私の瞳に、特高主任の緊張した口許だけが、大写しになった。そして、今度は、はつきりと、

山手署の特高主任 「おい、編集長、とうとう『中央公論』はつぶされたぜ。今朝の新聞にでている……」

藤田

おおきな支柱の一本が、はずされた感じであった。形式上ではすでに中央公論社の社員ではなかったが、心のつながりを、私は断つてはいなかった。だから、この「中央公論社がつぶされた」という知らせは、烈しく私をうった。

立ち去る特高主任に声をかけるきっかけも、私はつかめなかった。監房全体の外側の扉がきしり、鍵をおろす音がガチャンとひびいた時、私は新聞を自分の手にとって、自分の眼で活字の一つ一つを追って、事実をたしかめたいという欲望がはげしく湧きおこってきた。特高主任の言葉だけでは信じられない。あるいはよく使われる、ある種の手かも知れない。どうしても新聞を手に入れなければと、私は心にきめた。看守の手をおして新聞を手に入れようとしたが、いつもはうちとける看守も、

看守

「そいつは困る、責任問題だ、助けてくれないか……」

と、どうしても見せてくれない。私は監房の灰色の壁によりかかって終日、編集長時代のことをあれこれと回想した。

あのあらしの弾圧に抗してやれることは、社がつぶされる口実を敵に与えぬことだった。編集はゆずれない線のギリギリまで譲歩した。消極的な抵抗だったが、中央公論社全員の団結、それから執筆者と読者の組織的な雑誌とのつながりのもとでの起ちあがり、そしてあの烈しい戦争中、中国やアメリカで読まれていた雑誌『中央公論』の対外的な宣伝力の正当な評価を認識させることだった。多くの若い同僚が起ちあがってくれて、私たちは一歩、前進しはじめた。

しかし、伏勢は意外なところにあった。私は数名の同僚とともに検挙された。理由は治安維持法違反だった。

今度は、ここに烈しい戦いがあった。捏造されたこの事件に、私は全精神、全肉体をあげてぶつかっていた。負ければ敵の口実になる。肉体と精神の健全さだけが、この陰險なおとし穴だらけの、威嚇と、人間の弱さにつけこみ、あらゆる肉体を傷つける方法をもって攻撃してくる勢力を防御できる唯一のものだった。私は自分をきたえることに懸命だった。

かつての日、私は幹まわり一丈もあつた松の老木が、切り倒されたのを見た。斧がはいり、鋸が切りつけても、松は半日も泰然自若としていた。しかし、日暮れになって、最後の時がきた。松の木は悲鳴をあげ、あの針のような葉の一本一本をこまかにふるわせて泣いていたが、やがてどどと倒れかかり、砂埃りが舞いあがって夕陽が暗くなった。中央公論社がこの松の木のような感じがしたりした。

『中央公論社七十年史』によりますと、七月三十一日が解散の日ときまつて、全社員が大東亜会館に集まって会食し、別れの盃を交わしたそうです。嶋中社長は胃潰瘍で入院中で、こんな手紙を社員一同に寄せたそうです。

「この度のことは全く私の不明と不徳の致すところでありまして、皆さんをかう云ふ惨めな最後に追込んだことは、まことに申し訳ないと思ひます。……思へば永い間の悪戦苦闘でした。今日刀折れ矢尽きた形で退却しますけれど、思い残すことは何一つありません。国家のために良かれと思つた我々の誠意は、何時の日にか必ず認めらるる日のあるのを信じます。過去五十九年の足跡は厳として我文化史の上に遺るであります。この際我々は何にも云はないで、大波の退いて行くやうな形で、何の跡形も残さないでこの世から消え去りたいと思ふの

です。為すべきを為しつくした人間の最後はかくあるべきだと云ふことを、皆さんの態度に於て示して下さい。」

16.

唐沢俊樹

ご苦労だったな。やっと閣議決定に持ち込むことが出来て、大臣、お喜びだったよ。これで、神奈川の特高は眠ってたわけじゃないことを、示すことが出来たな。本庁の連中は口惜しがっているよ。なにしろお膝元の大物をつさらわれたわけだからな。神奈川県知事の近藤君も喜んでいた。彼も、神奈川の特高は何をしてるんだと言われて、肩身の狭い思いをしてたからな。……何？ 泊が立件できない？ 細川はどうしたんだ。……落ちない？ 駄目か、あのがんこじじい。……現地はどうした？ 富山の、泊か？ ……行ってみたけど駄目？ ……でもまあいい。中央公論、改造はつぶしたし、あとはどこだ、日本評論、岩波、朝日新聞にもお灸をすえてやったんだろ？ 近衛派の連中にも大分打撃を与えることが出来たし……あとは適当に、それぞれの組織で共産主義活動をしたことにでもして、辻褄をあわせて、裁判に持ち込め。山根検事にはよく話してやるからな。……おい表彰状貰ってやるから取りに來い。

女優3

これも、多分こんなことを言ったであろうという推測で、唐沢内務次官が、これくらいのことを言わなければ、この後の展開もなかったであろうという、この劇の作者の想像の産物ですが……序に申し上げておくと、ここでいう『大臣』というのは。総理大臣と陸軍大臣と内務大臣を兼ねていた東条英機のことです。

17.

映像——木村の語る笹下の未決暮らし。

木村

手記を書き終えると、笹下拘置所の未決に移されます。それまでは、同じ事件の被疑者は同じ警察に置かない、顔が合わないように横浜市内の警察にバラバラにおかれているわけですが、手記までたどりつけば、もう供述が動くことはないだろうということなのでしょう、未決では、同じ事件の被疑者同士顔を合わせることはありません。

中村

話なんかは、出来たんですか？

木村

できません。同じ事件の未決は一部屋おきに置かれていますから、体操に行く時にちらっと顔を見たり、何番何番と看守に呼ばれて「はいっ」と返事する声を聞いて、「ああ、彼奴も頑張ってるな」と思って、こちらでも聞こえるように大声で返事したりするくらいで、その程度でも警察にいる時とは大違いでした。

中村

今、体操とおっしゃいましたね？

木村

ええ、警察では許されなかった体操の時間が、晴れた日の午後にはあったんです。週に一度は入浴も出来ましたし、留置場と比べるとかなり清潔なものでした。

中村

ずいぶん違うもんですね。

木村

一番大きな違いは、ここでは名前ではなく番号で呼ばれたことですね。

中村

木村さんは何番だったんですか？

木村

ツの一四一番でした。

雑役の『床屋』

木村

(小声で)おい、一四一番。細川先生がお前のことを心配しているぞ。元気を出せよ！

『床屋』

木村

(小声で)本当か？ 細川先生がこの未決に入っておられるのか？
(小声で)ああ。
(小声で)なら、できたら先生にこう伝えてくれないか。俺たちは残念にも警察の拷問に負けて、事件のでっちあげを許してしまった。なんともお詫びの言葉もないほど、申し訳なく思っているとな。

『床屋』

(小声で)わかった。

中村

細川先生がおられたんですね。

木村

そうだったんです。

中村

伝言を伝えてくれたのは？

木村

村松という雑役囚で、器用な男で皆の頭を刈ったりしたので「床屋」と呼ばれていた青年で、細川先生に傾倒していましたね、その後もしばしばお使いをしてくれました。この時も、次の日の午後、看守の目を盗んで、

『床屋』

おい！

木村

チリ紙を丸めたものを配食用の窓からそっと投げ入れてくれました。
(拾って紙を拡げる)するとそこには、
「下肚に力を入れよ、

「暴言を吐くな」

配給のチリ紙に鉛筆の芯で書いた、細川先生からの伝言が二行に書かれているではありませんか。泊旅行の直後、逮捕されてから二年ちかくたっていて、その間に、我々の検挙から党再建準備会事件がでっち上げられてしまって、一体先生どうしておられるだろうかと案じていた矢先です。ああ、先生はお変わりなく不屈の気魄でおられると……。先生に叱られたわけですね。

中村
木村

我々は、特高の作文通りに、まさに暴言を吐いたわけですから。叱られて当然です。いくら拷問のせいとはいえ、こんなでっち上げを許してしまったぼくたちの弱さは、いくら責められても致し方のない誤りです。ですから、これから始まるうとしていられる予審で、自白が虚偽だということ暴露して、真実を主張しなければならぬ。そう思っ、泊の仲間たちに連絡を取りました。

中村

『床屋』さんが、大活躍したわけですね。

木村

そうです。彼に、チリ紙に鉛筆の芯で書いたレポを運んでもらって、

中村

ぼくは三つの申し合わせを提案しました。

木村

三つといいますと？

まず、特高の拷問の事実を暴露しよう、ということ。二番目が、党再建準備会は事実無根だということ事を主張しようということ。それから、我々は共産主義者ではないことを主張しようということ。

中村

で、どうなったんですか？

木村

(首を振る)……………。

18.

映像——留置場で体験した横浜大空襲の記録。

女優3

美作太郎・藤田親昌・渡辺清共著の『言論の敗北』の中に、被疑者が留置場で体験した横浜大空襲の記録があります。

「一九四五年五月十日、朝の点検を待つ間の、シーンと静かな午前九時頃であった。腹にひびく、押さえつけるような飛行機の爆音が断続した。空襲？ 不気味で不安な短い時間であった。爆音が圧倒するようになり大きくなる。不意に烈しい爆発。ガーンと頭がしびれた。地がゆれ、板壁が振動した。

山手警察では、直接の危険が切迫しないかぎり、留置人たちを退避させなかった。どのような危険が迫っているか、暗い留置場では知るこ

とが出来ない。自分の運命もいのちも、すべてを看守にまかせるほかはなかった。私の左手は思想犯らしい上野という朝鮮人の左手と手錠でつながれた。五〇人ばかりの留置人のうち、思想犯と目される四人が手錠でつながれたわけである。つめたい手錠の感じが手首にきつくこたえた。いまさら、あわてたところで、仕方がない、あぐらをかき、目をつむって、頭を壁にもたせかけていた。戦争は敗けるだろう。しかし、敗戦のドサクサの中で、われわれ思想犯は殺されるにちがいない。遅かれ早かれだ。半年か一年の命だ。——そんな考えが頭を通りすぎた。ヒュルル……と尾を引いた、焼夷弾らしい至近弾が爆発した。監房がはげしくゆれた。鉄格子と金網の間から砂塵がふきつけた。煙がもうもうと入って来た。思わず床に顔をふせて、むせた。ふだんは、看守にペコペコして、おべっかをつかっていた留置人たちが、一せいに立ち上がった。

声

このまま焼き殺すのか。

声

かんしゅーう。なにをしてるんだあ！

声

出せー、出せーえ！

看守

静まれ、静まれ。

別の看守

大丈夫だ。

看守

どうする？

別の看守

まだ、上の命令がない。

女優3

焔が留置場の廊下に入りはじめた。

別の看守

出せ、命令が出た！

女優3

一斉に留置場の扉が開かれた。

声々

うおーッ！

女優3

私は、手錠のはまった右手を、朝鮮人に引きずられ、体を斜めにのめらせながら走った。

看守

手錠をはめられた者はこっちへ来い。

別の看守

他のものは消火に協力する。駄目だったら逃げろ。しかし必ず帰って来い。帰って来ないと承知しないぞ！

女優3

私は、看守にみちびかれ、朝鮮人の手錠にひきずられて、警察の裏手の丘にある横穴防空壕に走った。ふりかえると、警察署は、赤い焔をあげて焼け落ちようとしていた。留置場のあったあたりは、一面の焔であった。真つ暗な防空壕の一番奥にひっばってゆかれた。

それからの数時間を、私はほとんど記憶していない。手錠をはめられた同士で、何かをしみじみ話し合ったような気もする。暗い、静かで、さわがしい、永い時間のようでもあった。

やっとのことで外へ出されると、煙がたちこめて、焼けた立ち木が五、六本突っ立っていた。警察署の建物はあとかたもなかった。」

これは、山手警察で空襲を体験した被疑者の記録ですが、その空襲を笹下拘置所で看守として体験した土井郷誠さんは、のちにこういう文章を書いておられます。

映像——笹下拘置所の看守だった土井郷誠の話。

土井郷誠

「当時の未決監の拘置所の建物は木造建築でしたから、空襲時に焼夷弾でも落とされたら、たちまち焼け失せてしまったことでしょう。昭和二十年五月の大空襲以後は、大空襲のときに限って独房の鍵だけは本錠を外しましたが、本人は決して房外に出すことはなく、煙にまかれてもそのまま、別にお隣の本屋に移すこともしませんでした。煙がもうもうと独房に立ちこめたことがありました。木村さんなんかは、『安全な所へ連れ出せ』

木村

と看守たちに要求していましたが、看守の中には、

看守の一人

『お前たちはトンカツにしてやるからな』

土井

とからかう者もいたくらいです。激しい空襲時には、まったくどうなるかと思つたものですが、幸か不幸か、刑務所構内に投下された焼夷弾も数発はありましたが、建物には当たらず、焼けもしなかったので、結局のところ敗戦時まで未決囚はそのまま独房に閉じ込めて、避難させずじまいになりました。もしも、あの焼夷弾の一発が拘置所の建物の一角にでも当たっていたら、あそこには消火器ひとつ、消防隊ひとり置いてなかったのですから、火焔と煙につつまれてほとんど誰ひとり助かる見込みはありませんでした。そんなことを未決監の人たちに知らせたら、混乱をまねくおそれがありましたので、消火器の不備や欠落はけっして知らせてはならないと上司から固く口止めされておりました。

女優3

それよりも、あとから思えば私でもおそろしくなることがありました。それは、当時、司法省のお偉いさんが秘かに決めていたことですが、そんな非常の際には収容者は射殺してもよいということになっていたことです。看守の私たちに上からの命令として伝達されていたことの中に、未決囚でも既決囚でも、逃走を企てるとか、命令に服しないので反抗と認められた場合、その人物を容赦なく即刻に射殺してもよろしいという指令が含まれていたのです。」

この土井さんという看守は、もともと警察畑の人ではなく、鎌倉の佛像彫刻の職人でしたが、戦時下で仕事がなく、募集に応じて看守の仕事に就いたのだそうで、この方も細川さんを尊敬して、事件関係者にいろいろ便宜を図らってくれたそうです。

土井

あんな離れわざは、われながらよくぞやったと思います。昭和二十年はじめの寒い日の夜更けでした。B29の空襲はもう昼夜を分かたず連続しており、戦況は日ましに悪化の一途をたどっておりまして。拘留所の役人も次々と応召して、人手も極度に不足しておりまして、看守の夜勤も、三つの獄舎を二人で、ときには一人で担当することがありました。その夜は私一人の勤務だったからやれたのです。上役が監視に巡回する時間と道順がわかっていましたので、うまく連れ出せば未決囚同士会わせることが出来ると思ったのです。細川さんは前々から木村さんと加藤政治さんの三人でぜひ一緒に会いたいものだ、ともらしておられましたので、私はこの時とばかり、それを実現することにしたのです。

無言のまま、まず木村を空房に連れて行く土井。

取って返して、今度は細川と加藤政治を連れに行く。

「先生」「おお、木村君」「加藤君」

意外な展開に手を取り合い、抱きあい、泣いて喜ぶ三人。

土井がビールを持ってくる。感激して飲み回す三人。

土井

私は精勤賞でもらったビールの栓を抜いて細川さんに渡しました。そして廊下に出て見張り番をしながら、目を房に戻してみると、三人がおたがいに抱き合って、両手を固く握りしめ合って、一本のビールをおいしそうに飲み回していました。私はこの光景を見守りながら、細川さんのかねてからの念願を叶えることが出来た思いで、感激ひとし

おでした。相擁して励まし合った三人も感無量のことであつたらうと思ひます。

19.

映像——1945年8月15日。日本敗戦。

ポツダム宣言受諾の玉音放送。

木村の房を『床屋』がのぞいて、

「床屋」

木村さん、あんたたちの言つた通りになりましたよ。ついさっきラジオで、天皇の降伏放送がありましたよ。

木村

ほんとか。

「床屋」

ほんとです。これ、細川先生からです。

丸めた紙片を投げ込む。急いで拾って、紙を拡げる木村。

木村

いそいで紙片のしわを伸ばしてみると、まさしく細川さんの字で、

「初鷄や八紘一字に鳴きわたる」

天皇の降伏放送を諷刺した一句です。そしてそのあとに、

「木村君、わたしたちに対する当局の不法拘禁は断じて許せない。総理大臣か、司法大臣がここへ来て、手をつけて謝らないかぎり、決してここは出てやらぬ肚を決めたまえ。」

独房のど真ん中に正座して、その紙片を読み終わったぼくは、その細川さんの呼びかけに対する共鳴と感激のあまり、ガバと起ちあがって、正面の鉄扉の上の框へ両手で飛びつく、ぶら下がった両足で鉄扉をガンガン蹴りつけました。ふだんなら巡視の看守が飛んできて、懲罰を食らうところですが、さすがにこの時は獄中がシーンと静まり返って、一人の看守の姿も見えませんでした。

20.

唐沢

どうしましうったって、こつちだつてわからんよ。進駐軍はどこまで干渉してくるのか、こつちの権限はどこまで認められるのか、全然見当もつかん。……日本が占領した時？ そんなもの参考になるか。……治安維持法がなくなるってうわさもある。そうなるまえに、けりをつけなきゃ。……大至急結審に持ち込んでだな。書類なんてどうで

もいいから。……裁判を急ぐんだ。場合によっては取引してもいい。裁判急ぐためなら言い分認めてやってもいい。……そう。……それから、事件関係の資料、各裁判所、各警察にあるやつ、全部焼いてしまえ。……保存？……馬鹿者！尻に火がついてるのがわからんのか。焼くんだ。いいか。何の痕跡も残すな！

21

木村

ぼくの予審は、なぜか一〇カ月ほど放っておかれて、一九四五年の三月から始まりました。ぼくは、申し合わせ通り、三つの主張をくり返しました。

中村

三つというのは、特高の拷問……？

木村

ええ、この調書は拷問の結果で、信用できないことを暴露する。二番目が……。

中村

共産党の再建会議はなかったと……。

木村

ええ、そんなものはなかったことを認めろという……。で、三番目が共産主義者だったという前提をくつがえす。これを予審のたびにくりかえしたわけです。

中村

予審判事は、石川さんでしたね。反応はどうだったんですか？

木村

拷問の話は、驚いたような顔で聞いてましたね。

中村

何かおっしゃいましたか？

木村

にやりと薄笑いを浮かべたままでした。

中村

ほかのことは？

木村

最初は黙って聞いていましたが、繰り返し申し立てているうちに、申し立てを認めるような雰囲気になってきましたね。

中村

ほう。

木村

そのうちに、戦局が大詰めを迎えて、敗戦ということになる。そして、八月の二十日ごろでしたか、石川予審判事に急に呼び出されました……。

映像——石川予審判事

石川予審判事

木村君、党再建のことは取り消すから、もうこの辺で妥協してくれないか。

木村

なんていうんです。

中村
木村
で。どうしました？
弁護人についでくれた海野さんにも、こんなことを言われましてね。

映像——海野晋吉弁護人

海野晋吉

長い間、ほんとにご苦労さんでした。どうだろう、いろいろ言い分はあるだろうが、この際この海野にすべてを任せてくれませんか。悪いようにはしない自信があります。任せてくれれば、明日にでも裁判を開いてもらって、万事終結です。

木村

ということは、それで釈放……？

海野

そのほうがいいでしょう。もうお仲間の皆さんは、どんどん復員したり、疎開先からもどられたりして、仕事をはじめてます。一刻も早く現場に復帰なさった方がいいでしょう。

木村

釈放……。

中村

それで、お任せになったんですか？

木村

がんばっておられる細川先生のことを思うと、忸怩たるものがありました。釈放の誘惑には勝てませんでした。

裁判長

被告を懲役二年、執行猶予三年の刑に処する

女優3

八月二九日、改造社関係四名。八月三〇日、昭和塾、政治経済研究会関係四名、九月四日、中央公論社関係五名。九月一五日、党再建準備会、いわゆる泊事件関係六名。そのほか、ソ連事情調査会関係など、グループごとに次々と形式的な裁判が開かれ、ほとんどが、懲役二年執行猶予三年を言い渡されました。この事件で有罪となったものは、三十三名。泊における日本共産党再建準備会は、どういわけかいつのまにか判決理由から消え去っていました。

木村

最後まで特高に屈しなかった細川先生は、治安維持法そのものがなくなつたために、免訴となりました。

女優3

事件の最初のきつかけとなった米国共産党員事件の川田夫妻は、これらにさきがけて、七月二五日に、これも形式的な裁判で寿さんが懲役三年執行猶予四年、定子さんが懲役一年執行猶予二年の刑をいいわたされています。逮捕されてから三年目でした。

川田定子

私は、どんなことがあっても仇を討とうと思っていたんですよ。独房のなかで、毎朝祈っていました。特高の松下と柄沢に何か悪いことがありますように、と。そして出たら、どんな乞食になってもいいから、日本じゅうの家を一軒ずつ尋ねて、松下と柄沢の家を見つけて放火して焼き払ってやろうと、そればかり一途に思って、獄に坐っていました。でもシャバに出たら気分が和んじゃって、仇を討ちに行こうと思わなくなっちゃった。もちろん今だって、いちど会ってぶつたたいやりたい、という気はありますよ。

22

木村

特高の拷問を許しては置けないという気持ちは、川田さんだけではなく、みんな持っていました。で、細川さんを中心に神奈川県特高の暴行事件を共同で告発する会を作りましてね、拘置所のある場所に因んで「笹下会」と称して、告発に踏み切りました。

中村

何人ぐらい集まったんですか？

木村

三十三人でした。

中村

告訴された方は？

木村

二十八人。

中村

でも、証人集めたり、証拠を集めたりするのは、大変だったでしょうね。

木村

証拠になりそうなものは警察がみんな焼いてましたし、証人には当時同じ監房にいた人を探したりしましたが、警察が手を回してるんじゃないかと思うんですよ、さっぱりみつきりません。結局、唯一認められた証拠が、ソ連事情調査会で捕まった益田直彦さんの〈かさぶた〉だったんです。

中村

かさぶた？

映像——益田直彦

益田直彦

そうなんです。竹刀の先をバラバラに解いたもので太腿を叩かれて、梅雨の時期だったのですっかり化膿してしまいました。赤チンだけはいくれたので、それをつけて、カサブタができたのをとっておいたのです。家内が差入れにきたときに、小指の先くらのを三つ四つチリ紙に包んで、しまっておくようにとメモを書いて、そっと渡しました。戦後、その赤チンだらけのカサカサに乾いたカサブタと太腿の傷跡が

一致すると、東大の法医学で鑑定されて、証拠になったわけです。他の人ののは、検事局で、特高告訴の口述書にある通りに実験してみたそうです。一時間も叩くなんてとてもできない、誇張だとはねられて、わたしのだけが取り上げられたそうです。

木村

告訴したのが昭和二十二年の二月、横浜地裁の第一審判決が出たのが、二十四年の二月で、松下英太郎特高係長に懲役一年半、柄沢六治、森川清造両警部補にそれぞれ懲役一年の実刑判決が出ました。彼らはすぐ控訴しますが、高裁でも同じ判決、かれらはまたすぐに上告しますが、最高裁でも判決は変わりませんでした。

中村

松下や柄沢は、今何をしてるんでしょうか？

木村

柄沢は知りませんが、松下は新橋でトンカツ屋をやっているそうです。

23

電話。

中村

はい、中村でございます。

松下

智子さん……ですか？

中村

はい、智子ですが……。

松下

松下ですが、うちの店に何回か置手紙されたのは……。

中村

ああ、はい、私です。

松下

すみません、いつも留守にしようとして。何か、聞きたいことがありませんか……？

映像——35年後、中村智子の取材に元特高係長松下は……

中村

実はわたくし、横浜事件のことを調べておりまして、いくつか松下さんにお伺いしたいことがあったもんですから……一度お目にかからせていただいて、と……。

松下

お話するようなことはありませんよ。もうすっかり忘れてるし……。

中村

いろいろ本も出ておりますが、松下さんのお立場からおっしゃりたいこともおありだと思いますし、それを伺わないと事件の真相も……。

松下

いまさら真相はわかりませんよ。三十五年も前のことで、記憶もありません。みんな忘れてしまいました。お話しできることはありませんから、お断りします。

中村

ではせめてお電話でも……三年半ぐらい前でしたか、テレビの取材で、小中陽太郎さんのインタビューに答えていらっしやいましたね。たしか「あの事件の真の指揮者は誰なんですか？」という質問に、「あれだけの大事件が、一地方の我々の力だけで出来るはずはない。でも、公務員には退職後と言えど守秘義務があるから言えない」と。そんなこと、言いましたかな。

松下
中村

それに対して青山さんが、「横浜の特高だけで仕組みないとすると、中央政府の、例えば内務省警保局のような」と突っ込んだら松下さんは、「あなたたちがすでにいろいろ言ったり書いたりしてるじゃありませんか。大方あの方向ですよ」とおっしゃってました。へえ、そうでしたか。全然記憶にありませんな。

松下
中村

そのことについて、今どのようにお考えか、改めて伺いたいと思いまして……。

松下

おぼえてませんな。駄目ですよ、もう年ですから。

中村

年たったって、松下さん、失礼ですが、おいくつですか？

松下

もう七十三ですよ。仲間は大抵死んじやいました。生きている者も、寝たきりです。わたしももうおしまいです。

中村

じゃこれだけお聞かせください。警察の方で、ご自身が懲役を体験された方は珍しいと思うんですが、刑務所はいかがでした？

松下

刑務所へなんか一日も行ってませんよ。

中村

ええ？ 一年半の実刑をくったんじゃないんですか？

松下

日本が独立した時、講和特赦になったんです。刑務所へなんか全然行ってませんですよ。

中村

そうだったんですか。初めて聞きました。

松下

御存知なかった？ 実刑なんか受けていませんですよ。

嘲笑うように言つて、松下は電話を切る。

木村

本当ですか。知らなかった。

中村

昭和二十七年の四月二十四日でしたね、最高裁が、彼らの上告を棄却して、実刑が確定したの。調べたらその四日後ですよ、講和条約の発効は。四月二十八日。

木村

近すぎる。特赦を当て込んで最高裁の上告棄却のスケジュールを早めたんじゃないか。

中村

そういいたくもありませんよね。占領から独立した日本は、拷問特高を守ったんだわ。

女優3.

唐沢内務次官の高笑いが聞こえるような話です。

男優3

ちなみに唐沢俊樹は、この後、衆議院議員になり、岸内閣では法務大臣に任命されます。

男優1

横浜事件をでっちあげた首謀者が法務大臣？

男優2

戦前も戦後も体制は変わってなかったってことか、

24

木村

もしもし。木村です。昔中央公論にいた、横浜事件の……ああ、しばらくです。お元気でしたか？……ええ、どうやらがんばってます。

……実は、今日お電話したのは、お願いがありましたね。先日、事件の犠牲者追悼会の折に、「考えてみたら、おれたち、みんな前科者だぜ。何もしないのに前科者って、こんなありかよ」という話になって、だれいともなく「これは再審請求をするべきじゃないか」という話になったんです。で、皆で手分けして、当時の被害者に連絡して、資料集めにご協力いただいたり、再審請求に加わっていただきましたと思っと思ってね、それでお電話させていただいたんです。……は？　で、すから、皆さん、今のお立場もおありでしょうか、強いてというわけではなく……そんなつもりでは……はい。(間)……私は、誰の名前も出してはおりません。……手記があるって、御存知じゃありませんか、あれは向こうの言うままに……はい。(間)……せめて、お考えいただくということで……。わかりました。失礼しました。

映像——再審請求の新聞記事、次々と。

女優3

苦労の末、ようやく再審請求にたどりついたのは、一九八六年七月。

事件から四一年たっていました。三十三人いた被害者のうち、再審請求に参加したのは九人。そのうち三人は、ご本人が亡くなられて遺族が参加しました。

女優2.

八六年七月に始まった第一次再審請求は、横浜地裁、東京高裁を経て、一九九一年三月に最高裁で棄却。審理をしようにも資料がどこにもない、というのが理由の、門前払いでした。

男優2.

証拠を焼き払ったのは警察や裁判所であるにも拘らずです。

男優1

第二次再審請求は一九九四年七月にはじまり、地裁、高裁を経て、二〇〇〇年七月に最高裁で棄却。小野康人氏の予審終結決定書と判決が

発見されたことから、その書類の不備を衝いての請求でしたが、これも門前払いに終わりました。

男優3
第三次再審請求は、ポツダム宣言受諾とともに治安維持法は効力を失ったのではないかという提起で、一九九八年八月に起こされ、二〇〇五年から再審裁判に持ち込みました。結果は免訴。

女優1
第四次再審請求は、二〇〇二年三月に起こされ、免訴であっても実質的に無罪になる方法を探って、刑事補償の裁判に持ち込みました。そこで事件が全くの虚構であることが明らかにされて、実質無罪の決定に至り、その後直ちに刑事補償の支払いが実行されました。二〇一〇年四月でした。

女優3
再審請求が起こされたから、二十四年め、事件が起こされたから六十年目にやっと獲得した『無罪』でした。

男優4
これが横浜事件です。
再審を請求した元被告は、全員亡くなった後でした。

男優2
再審請求に加わらなかった二十四人、拷問を受けながら起訴に至らなかった三十人余りの人権は、蹂躪されたままです。

男優5
これが横浜事件です。
自分がこんな目に遭っているのは誰のせいだ、という被害者同士の相互不信は、深い傷となつて、後々まで残りました。

男優6
これが横浜事件です。
横浜事件は二度と起きない——と言えるでしょうか？

映像——共謀罪の成立を報じる新聞記事。

ノックの音。あちこちから、さまざまな、脅かすような……。
暗くなる。

